

「宜野湾高校の生徒達へ(24)」で、『16歳の教科書 ～なぜ学び、なにを学ぶのか～』（講談社）を取り上げた。同書には、次のことも書いてあった。

いま現在、皆さんが確固とした将来の夢・希望をもっているならいい。それは幸せなこと。

だけど世の中、そんなに恵まれた人ばかりじゃない。

多くの人は、自分はどこに進んでいったらいいのか、**将来何をしたらいいのか、**

**わからないんじゃないかな。**

それでもって、周りの大人たちに「自分に向けた職業をめざせ」とか「好きなことを見つけろ」とかものすごいことを言われて悩んでいたたりもするんじゃないかな。難しいよね、そんなこと。

そもそも、あらゆる問いの中で、

「自分ってどういう人間なんだろう」「何をするのに向いているんだろう」

ということほど、難しい問いはない。

机に座って考えたってわからない。

だけどね、**手がかり**を得ることはできるんだよ。それも日常の中で。

それが「**違和感にこだわれ**」ということなんだ。

もしみなさんが「あれ？ なんでこんなことを見過ごされているんだろう」って思ったとしたら、

**チャンス到来。**

その違和感を握りしめてほしいんだ。

だれもが見過ごしていること、そこに違和感を感じる「感度」自体が、みなさんの**個性**だから。

自分の心に宿った小さな違和感、小さな不自然。それを放置しないことだよ。

**虫眼鏡で拡大して見極めるんだ。**

その**問題意識**の中にもこそ、大切な大切な「ほんとうの」自分が住んでいるんだからね。

**僕もそうやって、いまの仕事に辿り着いた。**

「総合的な探究の時間」でテーマを設定する際は、各自の「**違和感**」（ひっかかり）にこだわって下さい。さて、自分の「違和感」を探る手がかりとして、私は**新聞を読む**ことを勧める。沖縄タイムスや琉球新報などの地元紙もいいが、**全国紙の内容も充実**している。本校図書館には朝日新聞がある。

ちなみに5月13日に次のような記事(朝日新聞：天声人語)があった（一部引用）。

**求愛行動が造形美の域に達している鳥**のことを、ストリッカー著

『鳥の不思議な生活』で読んだ。オーストラリアなどに生息する**ニワシドリ**は、小枝で小屋のような構造物をつくり、そのできばえでメスを誘う。貝殻や木の実、ガラスのかけらなどで飾り付けをして。

制作現場に出くわした著者によると、この鳥は**自分の作品を様々な角度から眺め、ときたまクチバシでつついていた**という。まるで**画家がミスの手直し**をするかのように。

「芸術を人間だけのものにするには無理がありすぎる」と著者は記す。

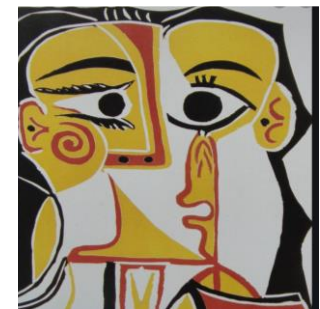
鳥のさえずりも、昔から歌や音楽にたとえられてきた。

パブロ・ピカソが反語的に、こんな言葉を残している。

「誰もが**芸術を頭で理解しようとする**。

ではなぜ鳥の歌を聞くときには、そうしないのか」。

芸術も、自然界の美も、理屈を抜きにして愛されるべきではないかと。



私は上の記事から、鳥の生態やピカソの言葉や絵に「**ひっかかり(違和感)**」を感じた。皆さんが「ひっかかる」「**気になる**」ような記事があれば、それを追っていくと、あなたの**やりたいこと**、**関心のあること**が浮かび上がってくるのではないかな。